

薬王寺

薬王寺のお堂には、文化財に指定された仏像や彫刻がたくさんあります。中でも一番大きな仏像は高さが約2.7mもある薬師如薬坐像です（堂内の仏像は通常非公開となっています）。

薬王寺の「薬王」とは薬の王様という意味で、あらゆる病気や悩みをいやす薬師如来の別名です。今から約1000年前の平安時代のもので、1本の木を削ってつくられました。また、のき先には2匹の竜の彫刻があり、生きていますかのよう動いたという伝説もあります。

薬王寺には遊歩道もあって、春から夏にかけてはサイコクヒメコウホネや大賀ハスといった植物を見ながら散策を楽しめます。



大賀ハス



サイコクヒメコウホネ



薬師如来坐像

薬王寺の上り竜と下り竜

～『可児のむかし話』より～



むかし、むかし。帷子ちゅうところであったことや。毎日、毎日、ひでりがつついて、田んぼも、畑も、そろも、からからにほしあがってしまったんやと。そんなもんで村の人は、こまっしてもうて、くる日も、くる日も、薬師堂にこもって、雨ごいのおいのりをしたそうじゃ。

ある日のこっちゃった。ひとりの年寄りな、おいのりにくたびれてまって、お堂から出て、薬師堂の階段に腰をおろしたげな。なにげなく、頭の上を見あげて、高粱に彫られた竜を見とった。

「さすが名人といわれた林市衛門と玉置吉兵衛が作ったものだけあるのう。みごとなもんじゃ。」

と、みとれておると、下り竜の舌がぺろぺろと動いたのやと。びっくりして立ち上がると、こんどは上り竜の尾がびりびりと動きよった。そんで思わず、

「竜よ、心あるなら聞いとくれ。この村にはな、もう一か月も雨が降らんや。なんもかも、すっかり枯れてしまいそうじゃ。奥の池も干上がってしもうた。おれんた百姓が、いちばんこまっするんじゃ。お前がほんとうに水をよぶことができるんなら、一雨恵んでくだされよ。」

と、いっしんに手を合わせんさったと。そのとき、ふしぎなことがおこったんや。にわかにかくも黒雲がひろがってな、稲妻が光り、雷がなり、ものすごい雨が降りだしたんじゃ。降って降って、降りつづいたちゅうこっちゃ。

あんまり降りつづいたもんで、こんどは大水がでよって、あぶななってきた。そこでその年寄りは、また、薬師堂へいって、

「いくら雨がほしいたって、池があふれ、堤が切れてしまつては、もともこもないわな。」

と、えらい怒ってなも、いなづまの光る空に向って、弓で矢を放ったんじゃ。そうすると、たちまち、雷鳴はおさまって、西の方から明るうなってきたんや。そして、水のひいた田んぼや、畑はだんだん、生き生きしてきたそうや。

村のしゅうはよろこんで、薬師堂にお礼にござったわな。そして、ふと高粱の竜を見上げるとな、ふしぎなことに、下り竜の片目がつぶれとったちゅうことや。

